

魔王が地上では救世主になっている理由

魔王の娘。
次期魔王を決めるゲーム
に参加し、地上世界にやっ
てきた。プライドが高く見
栄っ張り。時に思わぬ底力
を発揮する。

リーゼロッテ

ルキフェル

王都にある魔法学院の
学院長。物腰が柔らかく
優しげだが、どこか得体
の知らない人物。

シュエラン

魔王選抜ゲーム参加者
の1人。歴代最強の竜族
との呼び声が高い少女。

アルフレート

リーゼロッテの有能な従者。
常に無表情。実はお祭り騒ぎ
を傍から眺めるのが大好き。

ミレイア

リーゼロッテの親友の
吸血鬼。かなりの策略家。
ワインとお風呂を愛する。

マサト

異世界から召喚され
た勇者。女好きで軽い
性格だが、正義感は
人一倍強い。

ソフィー

ヒューマンの少女。街を
呪病から救う「聖水」を
手に入れるため、リーゼ
ロッテたちを旅の護衛と
して雇う。

サーシャ

キルストア教の元
巫女。マサトの旅
に同行する。

キュー

リーゼロッテの使い魔。
普段は小さくて可愛ら
しいが、変身後は恐ろ
しい姿に……



目次

プロローグ	6
第一章 ニグルカ編	12
第二章 ロスラヴリ編	134
第三章 ソルーシア編	210
エピローグ	289

プロローグ

その日、とある神殿のもっとも尊いとされている場所に、一人の少女の甲高い悲鳴が響いた。

円筒形の白亜の石柱が、円形の浅い水場を囲むようにして並び立っているこの場所は、キルストア教と呼ばれる宗教が崇める聖域の一つである。そびえ立つ石柱と、乳白色の大理石でできた床があるだけで、他は壁も天井もなく、澄んだ外気に晒されている神殿だ。

その中心にあたる場所にて、神官衣に身を包んだ少女は苦しげに身悶えた後、水の中に身を沈ませた。彼女の長い金髪が、水面に広がる。

少女の異変に、周りで見守っていた神官達が慌ててその水場へと足を踏み入れた。

満月の光を反射している水面が激しく波立ち、辺りを柔らかに照らしていた光が忙しく揺らめく。

真つ先に少女の下へ到着した白髪の老婆が、その場で膝をついて彼女の小柄な体を助け起こした。まだ幼さの残る頬を軽く叩き、意識の有無を確認かめる。

「サーシャよ、何があつたのじゃ？ 一体、何を見た？」

老婆は声を荒らげながら、未だ瞼を閉じたままにいる少女を少し乱暴に揺すった。その身を案じている様子はなく、ただ彼女が知るであろう情報を求める。

内容次第では、世界の行く末が左右されると信じているがゆえに、老婆は逸る気持ちを抑えられずぐったりとした少女に促しを促した。

再三にわたる呼びかけに、ようやく瞼を開いた少女は、唇を小刻みに震わせながら、今しがた受け取った託宣を口にする。

「大陸の地下から、溢れ出す禍々しい闇。それがやがて、世界を覆い尽くすであろう」

彼女が告げた内容に、周りに集まってきていた神官達が騒ぎ出した。

「なんと不吉な……」

「地下の闇、まさか魔界から魔族がやってくるんでも？」

「魔界に通じる穴は、五百年前に封印されたのでは？」

「しかし、この符帳はそれしか考えられん」

口々に不安を吐き出すようにして言葉を重ねる神官達。彼らは皆、これが五百年前にあつたとされる暗黒期の再来を意味するかもしれないと考えていた。

暗黒期とは、地下の魔界から強大な力をもつ魔族達が襲来し、地上が蹂躪された時代のことである。たった十年という短い歳月の間に、ヒューマンの文明が破壊し尽くされ、多くの魔法技術が失われてしまった最悪の時代。史実では、幾人かの勇者とエルフやドワーフといった他種族の代表らが協力し合い、魔族達を魔界に送り返したと伝えられている。

その暗黒期の再来の予兆に、神官達は動揺して益体もない言葉を連ねる。やがて不安のあまり口論にまで達しそうになった時、老婆の大喝が他の全ての声を掻き消した。

「静まらんか！」

怒気の込められた声が響き渡った後、聖域にあるべき静寂が戻る。

老婆は神官達の沈黙を確認すると、今度は一転して落ち着いた声音で言った。

「……まずは、各国に使者を出せ。できうる限り早急にじや。此度の託宣を、各国の王達に伝えねばならん」

幾つかの指示を、冷静かつ的確に出していく。

老婆の指示を受けて、神官達もようやく冷静さを取り戻し、それぞれがとるべき行動を開始した。そんな彼らの姿を見送ってから、老婆は小さく独りごちる。

「今こそ、我らヒューマンは手を取り合わねばならんのじゃが……」

そう上手くはいかないことを老婆は予感していた。魔族の襲来に備えようにも、国々の中枢機関や代表者達は主導権や利権を巡って揉めるだろうと。

その顔を不安そうに見つめる少女を腕に抱えたまま、老婆は祈る。

願わくば、我らヒューマンがそこまで愚かではありませんように――



――魔界。

大陸の地下にあるその世界には、昼や夜といった概念はなく、空には星々の光さえない。

もし普通のヒューマンがそこに放り込まれば、あまりに濃い闇に本能的な恐怖を覚え、生きてはいけないだろう。

だが、久遠の闇に覆われた世界に棲むのは、それを物ともしない魔族達だ。

そして魔界は一種の異次元空間になっており、大陸の地下にありながらも、地上より遥かに広大であった。そこに棲む魔族の数も、地上に住むヒューマンの人口を凌駕する。

一個体ごとに高い戦闘力をもつ魔族が、地下でそんなにも数を増やしているとヒューマンが知れば、それだけで絶望に打ち拉がれることだろう。

地下の闇に蠢く強者達。彼らを統べるのは、たった一人の魔王。

その後継者候補とされる者達が今、魔王城の中庭に集まっていた。

魔界の有力な種族の代表、一二七名。姿形も大きさも各々異なる者達は、同じ目標に胸を躍らせ、気分を高揚させている。

やがて城の上階にある華麗なバルコニーに一人の男が姿を現すと、魔王候補達の興奮は一気に高まった。

二本の拗くれた太い角と、一对の黒い翼をもつ人型の魔族だ。黒髪に褐色の肌と、闇に溶け込んでしまふような姿だが、金色の瞳だけがギラギラと存在感を放っている。

その瞳で彼が見下ろすと、中庭にいた者達は一斉に静まり返った。

彼ら、あるいは彼女らの反応に満足そうにうなずいた魔族の男は、声を拡大する魔道具を片手に持ち、自らの後継者候補らに呼びかける。

「みんな！ 地上に、行きたいかーっ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

魔王の声に、ノリの良い性質の種族達が一斉に雄叫びで応じた。

それにますます気分を良くした魔王は、さらに声を張り上げる。

「どんなことをしても、魔王になりたいかーっ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「罰ゲームは、怖くないかーっ!!」

「……………オオウ」

急速に熱気が冷めていく候補者達。魔王が考える罰ゲームは色々な意味で酷いことで有名なせい
か、既に一部の怖じ気づいた者が、棄権したそうな雰囲気醸し出していた。

「ば、罰ゲームはないから安心してくれ」

候補者達のテンションがだだ下がりになったことを察し、魔王が慌てて取り繕う。

ちよつと調子に乗りすぎたのを反省しつつ、気を取り直して彼は高らかに宣言した。

「ではこれより、五百年に一度の祭典、魔王選抜ゲームを開始する！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

再びテンションが急上昇した候補者達の様子に、魔王は胸を撫で下ろす。

そして、いつの間にやら彼の真横に垂れ下がっていたヒモを、左手で掴んだ。ヒモの上端は彼の
頭上で円状に渦巻いている黒い闇の中へと消えており、それがどこに繋がっているのかは分から
ない。

「では、地上へジャストミーンーート！」

そう叫んでヒモを引くと、中庭の地面が真っ二つに割れた。

唐突に現れた底の見えない落とし穴に、魔族達が一斉に落とされる。中には飛行能力を持つ個体
も沢山いたのだが、彼らも念入りに仕掛けられた重力魔法には逆らえなかった。

体の重さが何倍にもなった魔王候補達は、一人残らず穴の中へと消えていく。

「……あ、ルール説明忘れてた」

直後、ポツリと呟かれたその言葉を聞いた者は誰もいなかった。

気がつけば、リーゼロッテは空から落下していた。

慣れない陽の光に、思わず両目を固く閉じる。

黒と赤を基調とし、レースやフリルで飾られた華美なドレスが、強烈な風圧によりバタバタと暴れた。

とにかくこれは緊急事態である。リーゼロッテは眩しさに耐えながら、何とか薄く瞼を開いて状況確認に努める。

周囲を見渡すと、自身と同じくらいの高度に雲が漂っているのが遠目に見えた。

なんとなく自分が陥った状況を理解して、リーゼロッテは落下先を見遣る。そこは海や湖だったという慈悲もなく、ただ硬そうな地面が待ち受けていた。

彼女には空を飛ぶ力がなく、この速度で地面に激突して無事でいられる耐久力もない。

リーゼロッテはゆつくりとした思考で、今もつとも差し迫った問題を認識した。

「……せっかく綺麗にセットできた髪が台無しだわ」

激しい空気の流れに逆らいながら、赤味の強い栗色の髪を梳こうと苦心する。

長い髪を左右に二つ、やや高い位置で括ったこの髪型は、リーゼロッテのお気に入りだった。小

柄な体躯とまだ幼い相貌によく似合っていると、友人からお墨付きをもらっている。

だが、幾ら手で梳いても、この状況では当然すぐに乱れてしまう。少しの間、悪戦苦闘してみたものの、やがてリーゼロッテは諦めた。

そしてようやく、現実逃避気味に目を逸らしていた、自らの未来のことを考える。

このまま落下すれば、確実に致命傷を負うだろう。かといって、この状況を脱する能力もリーゼロッテには無かった。

「……え？ もしかして私、これで死ぬのかしら？」

意気揚々と魔王選抜ゲームに参加し、期待に胸を膨らませた直後に陥った絶体絶命の危機。死ぬのはともかく、もしかしくなくてもゲーム史上最速の脱落者として名を残しそうなのは、あんまりだった。

なのでリーゼロッテは、特に根拠もなくこの苦難は乗り越えられると信じることにする。

「これはあれね。もうすぐ私のもつ秘められた力が覚醒するのね。首に掛けているペンダントが光り出して、体がフワッと浮いて、地上では純朴で愚かな少年が――」

「待ってませんし、浮きませんよ？」

唐突に、男の声がリーゼロッテの言葉に割り込んだ。

その声の主へ視線を向けると、黒い執事服を着込んだ魔族が、自分と同じ速度で落下しているのが見える。

彼は、魔王の娘であるリーゼロッテが召し抱えている、アルフレートという名の執事だった。

やや長めの銀髪に吊り上がり気味の目尻が特徴的な男だ。いかにも切れ者といった印象を与える縁なしの眼鏡と無表情のせいかな、会う者は皆、口を揃えて鋭利な氷のようだと評する人物である。

頭から自由落下しているリーゼロッテとは違い、彼は足から落下しており、その上なぜか眼鏡や服は、風圧の影響を少しも受けていないように見えた。

「そもそも、リーゼロッテ様はペンダントを身につけておられません」

「……迂闊だったわ」

自らの準備不足を反省して、リーゼロッテは顔を俯かせる。

彼女の思考は今、頭のネジが一本飛んでしまったかのように混乱していた。

「これはいいよ、打つ手なしね」

「いはいえ、私にお任せくだされば、この程度の窮地なぞ何とでもなりますとも」

「え、本当？」

アルフレートの言葉に、リーゼロッテは一瞬だけパアッと顔を輝かせる。

だが魔王の娘という身分で育ったがゆえ無駄にプライドが高い彼女は、すぐに澄ました表情に戻すと、できるだけ尊大な所作を心がけてうなずいた。

「そう、優秀なあなたがそばにいてくれて良かったわ」

「もったいないお言葉」

リーゼロッテとしては取り繕ったつもりでも、安堵から目尻にはうっすらと涙が滲んでいたりする。そんな彼女の様子に、アルフレートはわずかに唇の端を吊り上げて、邪な笑みを浮かべた。

だが彼のそんな表情には気がつかないまま、リーゼロッテはいよいよ近くなってきた地面を見て、焦る気持ちを悟られないように言う。

「では、お願いできるかしら？」

「かしこまりました」

アルフレートが器用にその場で一礼すると、彼の眼前に青い光の糸が走り、一瞬で魔法陣が浮かび上がった。

リーゼロッテは内心、その速さに舌を巻く。

どんな種族でも魔法を発動させるためには、魔法陣を描くことが必要不可欠である。自身の体内にある魔力を細い糸のようにして放出し、それを魔法陣の形にすることで魔法を発動させるのだ。

そして魔法陣の構成は、より高位の魔法になるほど複雑なものになっていく。

例えば上位魔法ともなると、ヒューマンの中で特に魔法の行使に秀でた者であっても、発動させるのに最低でも数十秒の時間を要するのだ。

アルフレートは、その上位魔法を一秒未満で発動させたのである。それは魔力の扱いに優れた魔族の中でも、トップクラスの速度だった。

リーゼロッテが彼の絶技を見て感心していると、すぐに魔法の効果が現れ、急激に降下速度が落ちていく……アルフレートだけ。

リーゼロッテからは、彼が空へと急上昇していったように見えた。

凄まじい速度で、アルフレートとの距離が離れていく。

「……え？」

思わず間の抜けた声を出したのとほぼ同時に、彼女は頭から地面に衝突した。ドボンッ！と妙な音を立てて、リーゼロッテの体が腰の辺りまで地面に沈む。その数秒後、地面から生えた足の隣に、アルフレートがふわりと優雅に着地した。

「――、――？（暗いわ、ここはどこ？）」

リーゼロッテが地面の下で呻きながら、仕立てのいいブーツに包まれた足をジタバタと動かす。逆さまになったことでスカートが捲れ、下に穿いているドロワーズが丸見えになっていた。

アルフレートはその姿を見て満足そうにうなずいた後、彼女の足を掴み、雑草を地面から抜くような感覚で引き上げる。

すると、地中に隠れていたリーゼロッテの顔が露わになった。

彼女の自慢の一つである透き通るような白い肌が、今はおびただしい量の鼻血と土で汚れてしまっている。

少し混乱しているのか、リーゼロッテはキョロキョロと辺りを見回した。

どうやらここは、ヒューマンの街と街を繋ぐ街道のようである。

少し離れたところには、魔界とは違う色をしている森もあり、街道はその間を切り開くようにして続いていた。

自分が地上にいることを理解した彼女は、逆さまの体勢のままで、ふと頭に疑問符を浮かべる。

「何が起ったのかしら？」

「一時的に地面を柔らかくする魔法を発動させ、落下時の衝撃を和らげました」

「そう、それは大儀だったわ。でも些かスマートさに欠けると思うの」

「申し訳ございません、命をお救いするだけで精一杯でした」

アルフレートはそう弁明しつつ、リーゼロッテを地面に下ろす。

やっと逆さまの世界から解放されたリーゼロッテは、衣服や頭についた土を軽く払った。アルフレートから差し出されたハンカチで鼻血を拭いつつ、訝しげな目を彼に向ける。

「……気のせいかしら？ あなたは、私よりも無事に見えるのだけど？」

「気のせいでございます」

「……そう」

色々と言いたいことはあったが、「気のせいだ」と言い張られそうなので諦めた。一応は助かったのだから、細かいことは気にしないようにする。

「それにしても、落とし穴の先が地上世界に通じているとは思わなかったわ。私はてっきり、魔界の上にあるのだと思っていたから」

「いえ、魔界がこの世界の地下に位置することは確かです。あの落とし穴には、地上世界のあらゆる場所へランダムに転移させる魔法が仕掛けてあったようです」

「そう、なるほど。……あなた、よく私の転移先が分かったわね」

あの穴に落ちたのは、魔王の候補者である一二七名だけだ。ランダムに転移したはずのリーゼロッテを、アルフレートは正確に探し出して追いついたことになる。

「リーゼロッテ様には常に探知魔法をかけておりますので」

「抜かないわね」

「はい。リーゼロッテ様がよく迷子になられるので対策していたことが、役に立ちました」

「……聞かなかったことにするわ」

アルフレートから顔を背け、明後日のほうを向く。胸に湧き上がった気恥ずかしさをごまかすべく、リーゼロッテはさつさと話題を変えることにした。

「そんなことよりも、早くゲームを始めましょう。幾ら優秀な私でも、うかうかしていたら他の候補者達に遅れをとってしまいうわ」

他の一二六名の魔王候補達も、リーゼロッテと同時に地上世界へ来ているはずである。のんびりしている暇はないと、彼女は早速行動を開始しようとして……ふと首を傾げた。

「そういえば、これから私はどうすればいいのかしら？」

「……魔王様がゲームの説明を忘れておられたようですね。ですが、ご安心ください。そろそろ来るはずですよ」

そう言いながら、アルフレートが何かを探すように視線を彷徨わせていると、空から一羽の鳥が舞い降りてきた。

一見、普通の黒い鳥に見えるが、足が三本あって両目は血のように赤い。その小さな外見とは裏腹に大きく禍々しい魔力を秘めた怪鳥に、リーゼロッテは見覚えがあった。

「ヤタガラスね。お父様が創造した使い魔だったかしら？」

「はい。恐らくは他の候補者の下へも、同様にヤタガラスが差し向けられていると考えられます」

ヤタガラスは二人の前に降り立つと、大きくクチバシを開いてそのまま停止する。すると、そこからリーゼロッテのよく知る人物の声が流れてきた。

『いや、すまんすまん。ルールを説明するのを忘れつつたわ。といってもルールは単純だけどな。これから配るカードに記載されている総合順位で、十年後に一番だった奴が優勝だ。それ以外は特にルールはないから、好きにやってくれ。それと——』

そこで、ヤタガラスの両目が鋭い光を放った。と同時に、リーゼロッテは左の手の平に火で直接炙られたような痛みを感じる。

何事かと顔を顰めつつ見ると、複雑な紋様が焼き印のように刻みつけられていた。

『今、各々に死者の魂からマナを吸って魔力の成長を促進させる能力をプレゼントした。力をもった個体の魂ほど、保有してるマナは多いぞ。だが強い個体を狙いすぎて、逆に狩られないようにな。それで、魔王に相応しい魔力値を目指してくれ』

リーゼロッテは手の平の紋様を眺めながら、隣のアルフレートに尋ねた。

「これはつまり、ヒューマンを殺せば殺すほど、魔力が上がっていくということかしら？」

「いえ、別にヒューマンに限らず、地上世界で生きていて魂がある者は、全てマナを保有しています」

彼曰く、マナは太陽から降り注ぐ光に含まれており、地上に住む者の魂に少しずつ蓄積されるものなのだそう。

太陽のない魔界にはマナが存在しないため、リーゼロッテはマナについて何も知らなかった。なのでアルフレートは、そんな彼女にも分かるように説明する。

要約すると、魂からマナを吸えるのは、対象が死んだ直後で魂が現世に残っている間だけである。そしてマナがある程度溜^たまると「レベル」が上がり、魔力が上昇するらしい。

また、レベルが上昇すればするほど、次のレベルアップに必要なマナの量は増大していくのとだった。

『じゃあ最後に今からカードを送る。色々便利な機能も付いてるから、大事にしろよ』

魔王との通信が切れると、ヤタガラスの尻にあたる部分から、四角い何かが勢いよく飛び出した。微^{かす}かに魔力を感じるので、魔道具なのだろう。

恐らくは、それが魔王の言っていたカードと思われるのだが……

「……切実に触りたくないわ」

創造物の鳥とはいえ尻から出てきたソレを前に、思わずリーゼロッテは後退^{あとずさり}する。

だがそのカードを見ないわけにもいかず、長い逡巡^{しゆしゆん}の後でハンカチ越しに拾い上げ、できるだけ体から離すようにして書かれている文字を読んだ。

【名前】	リーゼロッテ・ シャンツァーラ
【種族】	魔人
【レベル】	1
【取得マナ】	0
【魔力値】	60
【スキル】	マナ吸引
【魅力】	121位
【魔力】	119位
【知力】	120位
【財力】	127位
【素体】	125位
【知名度】	未集計
【総合評価】	127位

リーゼロッテはその内容に、しばし沈黙する。逆さまにしたり、裏返したり、空にかざしたりしても変わらない表記に、彼女は空いているほうの手で目を擦^{こす}った。

「……おかしいわね、目が悪くなったのかしら？」

「恐らく両目ともに正常かと」

「いえ、やつぱりおかしいわ。だって前が滲^にんで見えなくなってきたもの」

「それは涙のせいです」

全ての項目において低すぎる順位。突き付けられる現実。心の弱い者ならば、この時点で捻^{ひね}れてしまっただろう。

だがリーゼロッテは頬^ほを伝う冷たいものを拭^{ぬぐ}うと、俯^{うつむ}きかけていた顔を上げて小さな胸を張った。「悲観することはないわ。だって、ゲームはまだ始まったばかりですもの」

「その意気です、リーゼロッテ様。たとえ今まで行われたゲームの記録で、最初に最下位だった者は九割の確率で最下位のままゲームを終えていたとしても、諦めない心が大事です」

「……正しい現状の把握は大事ね」

早くも諦めて魔界へ帰ることを考え始めたリーゼロッテだった。



陽の光が届かず薄暗いその場所には、大人の倍以上の高さをもつ本棚が幾つも据えられていた。全ての本棚にギッチリと本が詰められており、一冊一冊が非常に希少価値の高いものである。世界のほとんどを本のみで埋め尽くされる眺めは、壮観と言っていいたろう。

まさに様々な知識と記録が集められた情報の空間。その一角にて、一冊の古書に視線を落としていた老婆が、顔を上げて目を見開いた。

キルストア教が所有する、恐らくは世界でもっとも巨大な地下書庫。そこにいながらにして、たった今、幾つもの厄災が地上に現れたことを、神官長である老婆は類い希なる能力で察知する。それは近くにいたサーシャという少女も同様だったようで、不安そうな視線を老婆に向けた。

「神官長、これは……」

「うむ、とうとうこの時が来てしまったようじゃ」

サーシャの言葉に、老婆が深刻な表情でうなずく。

あの託宣たくせんを授つてから、迅速に凶報を伝えて回ったにもかかわらず、ついに各国の足並みが揃うことはなかった。

キルストア教が儀式によつて授かる託宣は、その性質上どうしても情報が曖昧になる。そのせいか「何かの間違いではないか？」と言い出す国も多く、挙げ句の果てには、キルストア教の勢力を広げるための虚言ではないかと陰口を叩く国まで現れた。

結局、この未曾有みぞうの危機にあつて、ヒューマンは今日もこれまでと変わらない時間を過ごしている。本来ならば早急に手を取り合い、魔族の襲来に備えなければならないこの時にだ。

さらに森に住むエルフや、鉾山に住むドワーフといった他種族に至っては、応答すらない。

そうして何の準備もできぬまま迎えてしまった厄災の時に、サーシャは暗い表情で未来を憂うれえた。

「世界はどうなってしまうのでしょうか」

「それは分からぬ。だが我々の足並みが揃わぬ今、もはや残された道は一つしかあるまい」

老婆はそう言つて、手にしていた書物に再び視線を落とした。

いつもは司書以外には見当たらず、常に静寂に包まれている地下書庫も、今は人で溢れて騒然としている。幾人もの神官や魔術師が慌ただしく動き回り、一つの情報を求めて本を漁あさっていた。

その情報とは、五百年前のヒューマンが苦し紛まぎれに縋すがつたとされる、最後の希望――

「何としても、異世界から勇者を召喚するのじゃ」

老婆は祈るような気持ちで、そう独りごちた。

キルストア教徒が地下書庫で必死に調べ物をしていた頃。

厄災の一端であるはずのリーゼロッテは、改めてカードの表記を見て、ぽつりと呟いた。

「一二一位……」

「魅力のことですか？」

小さな声をしつかり聞き取っていたアルフレートが、すかさず反応する。

それを、リーゼロッテは動揺しつつ否定した。

「ち、違うわ」

「しかし、一二一位といえば魅力しかございませんよ」

「……従者が優秀すぎるのも問題ね」

「誰でも分かるところなのですが」

「この項目がよく分からなかったから、少し気になっただけよ」

「左様でございましたか。よろしければ、簡単にご説明致しましょうか？」

「お願いするわ」

「かしこまりました。それでは——」

そう前置きをしてから、アルフレートはカードに記された項目の解説を始めた。

彼によると、魅力の評価においては美しさだけでなく、迫力や神々しさといった相手に畏怖を与

える要素も重視されるらしい。なので純粋に外見だけの評価であれば、綺麗な毛並みや鱗をもつ種族が有利で、人型の種族は不利なのだそうだ。

それを聞くと、リーゼロッテは思わず安堵の息を吐いた。

「つまり、顔はあまり関係ないのね。女としてのプライドが傷つきかけたわ」

「ですがまあ、恐らく人型の女性魔族に限っても、順位は低いと思われます」

「……」

表情が固まったリーゼロッテを見て、アルフレートがわざとらしく咳払いをする。

「失礼、リーゼロッテ様も個性があつて魅力的でございますよ」

「……どうしてかしら？ 褒められたはずなのに、言葉が胸に刺さるわ」

実は淫魔や吸血鬼などがもつ魅了の力なども魅力として評価されるため、人型のみ順位においても顔の造りはそれほど関係ないのだが、そのことを知らないリーゼロッテは大いに落ち込んだ。

そもそも魅力だけでなく、全ての評価が軒並み低いことが、プライドの高い彼女にはかなり応えていた。今すぐ魔界に帰って寝込みたい衝動を、何とか我慢する。

「他の項目も補足いたしますと、魔力は内包する魔力量のみ、知力は知識量のみ、評価であり、魔法の発動速度や頭の回転の速さなどは評価の対象外でございます」

「ふむ。……この素体や財力は、どういったものの評価なの？」

「素体とは魔力の影響を除いた純粋な肉体の強さと、使用できるスキルの評価です」

スキルとは、各個体の肉体に宿った特殊能力のことである。魔法とは違って魔力を消費せずに使

えるが、魔力により強化することも可能であった。

アルフレートの話によると、レベルが上がれば新しいスキルを習得することもあるらしい。

「財力は、ヒューマンの間で流通している通貨の所持量によって評価されます。あと、これも魔王様のご説明には無かったのですが、実はヤタガラスを通じて、魔界通販を利用することが可能です」

魔界通販とは、このゲームのために用意された、ヒューマンの通貨で取引ができる通信販売なのだそう。魔界製の装備品やゲームにおいて役立つアイテムが、地上からでも購入できるらしい。

「最後に知名度ですが、これは地上世界で名前がどれだけ知れ渡っているかによって評価されます。ゲーム参加者はまだ地上に来たばかりですので、順位は出ていません」

「つまり、地上に住む者を支配して私を恐れ敬うやまつわせば、評価が上がるのかしら？」

「それが一番魔族らしくはありますが、対象が名前を知っているだけで評価されますので、対象が抱く感情の種類は関係ありません」

つまり、どういった方法で名を広めるかは自由ということだ。名を知っている者の数だけで評価が決まるので、極端な話をすれば、慈善活動などで名声を広めてもいいらしい。

と、そこまでの説明を受けて、ふとリーゼロッテは不思議そうに首を傾げた。

「それにしてもあなた、ゲームについてかなり詳しいのね」

「はい、私は前回のゲームに参加いたしましたので」

「え、そうなの？」

「お恥ずかしながら」

自分の従者が、父が勝利者となった前回のゲームに参加していたとは初耳だった。

有能でいつも澄ました顔をしている男が出した結果に、リーゼロッテは非常に興味をひかれる。

「あなたのことから、かなり良い成績だったのではなくて？」

「最終的な総合順位は二位でした」

「……え？」

アルフレートの返事に、リーゼロッテは思わず呆けてしまった。

魔王選抜ゲームに参加した者は、ゲーム終了後、新しい魔王の裁量により、それぞれの成績に応じた仕事を割り振られる。だから前回二位という好成绩を収めた者が、なぜ要職に就つかず自分の従者などやっているのか理解できなかったのだ。

「魔王様は、ご息女であるリーゼロッテ様をそれほど大事になさっているということですよ」

「そう」

素っ気ない返事とは裏腹に、リーゼロッテは気恥ずかしさと嬉しさから頬ほを紅潮させる。

「それだけに、今回のゲームではリーゼロッテ様のご活躍を期待なさっていることでしょう」

「そ、そう……」

その言葉に、今度は一転して顔を青くした。現状を冷静に考えると、父を満足させる活躍は無理なのではないかと不安になったのである。

弱気になりそうな自分をどうにか奮起させ、とりあえず今後の行動をどうするべきか、今の能力

と照らし合わせて考えることにした。

「だいたいヒューマンって、どれくらいの強さなの？」

「今のリーゼロッテ様ですと、そこそこ強めのヒューマン数人と戦って互角といったところですよ」

「そう……ちよつと予想外ね」

リーゼロッテは、存外にヒューマンが強いらしいことに驚く。彼の言う通りだとすれば、これらの行動には最大限の注意を払う必要が出てきた。

後先を考えずに順位を上げるなら、大暴れしてヒューマンを殺し、金を略奪し、悪名を広めつつマナを収集するのが手っ取り早い。

しかしそうすると、ヒューマン側も暴れている魔族を狩ろうとするだろう。目立ちすぎるとヒューマンの強者を引き寄せることになるし、一人一人は大したことがなくても、数で攻められれば負ける可能性が高い。

さらにはヒューマンだけでなく、他種族の戦士が出張ってくることも考慮しなければならないのだ。何も考えずに動けば、あつという間にゲームオーバーとなるのが容易に想像できる。

なのでレベルを上げて力をつけるまでは、水面下で動く必要があった。

「……でも慎重に動かざるを得ないのは、他の候補者達も同じはずよね」

焦る気持ちを抑え、リーゼロッテは自分に言い聞かせるように**呟**く。

だがアルフレートは、そこに容赦なく水を差した。

「ちなみに素体の評価がトップの者は、魔力なしでもヒューマンの騎士一個大隊以上を軽く殲滅で

きるぐらいの強さです。魔力を使えば、もはやヒューマン程度に負けることはないでしょう」

追い討ちをかけられ、リーゼロッテは遠い目をして空を見上げる。

「……私、参加することに意義があると思うの」

「ちなみに、前回のゲームで最下位だった者が就いた役職は魔王城のトイレ掃除係です。あと宴会では毎度の腹踊りと下ネタ芸が義務付けられましたね」

「死に物狂いで頑張るわ」

リーゼロッテは、命を懸けて**這**い上がる決心をした。



ひとまずリーゼロッテは、空から落ちている時に遠目に見えたヒューマンの街へ向かうことにした。

魔人である彼女と従者のアルフレートは、外見だけならばヒューマンと区別がつかない。それを利用して、当面はヒューマンに紛れ、**まぎ**街に腰を落着ける心積もりである。

「ここからだ、歩いてどれくらいかしら？」

「空から見た限り、二日程度の距離だと思われます」

「そう」

ちなみに、この二日程度というのは不眠不休で歩き続けた場合の話だ。夜の闇の中でも昼間同然

に見通せる目と、ヒューマンとは段違いの体力をもつ魔人だからこそ可能な行程である。

リーゼロッテは街までの長い道程をゆったり歩みながら、何気なく手の平の紋様を眺めた。

「……コレは、別にヒューマンの魂からじゃなくてもマナを吸えるのよね？」

「はい。地上にいて魂をもつ個体でしたら、相手がどんな種族でもマナは集められます。ただし注意点として、リーゼロッテ様ご自身が手に掛けた者の魂からしかマナは吸引できません」

「ふむ？」

アルフレートによると、相手が「リーゼロッテにやられた」と認識していないと、マナが吸えないのだそうだ。例えばアルフレートが相手を瀕死に追いやり、リーゼロッテが止めだけ刺した場合、マナを吸える可能性は低いということである。

他にも背後からの不意打ちや、毒や罠によって殺害するなど、相手がリーゼロッテによるものと認識できないような殺し方ではマナは吸えないらしい。

以上のことを踏まえると、マナを確実に吸うため、まずは相手にリーゼロッテを強く印象付ける必要があるそうだった。

「そうね、まずは格好いい名乗りやポーズを考えてみようかしら」

マナを吸うため、相手に自分をアピールする。実はヒューマンに「魔族は目立ちたがり屋が多い」という偏見を与える要因となっている発想に、アルフレートはさすが反応した。

「そういうことでしたら、私にお任せくださいませ。リーゼロッテ様に相応しい、華麗な口上とポーズを用意させていただきます」

「そう。ならあなたに任せるわ」

リーゼロッテの立ち位置からは彼の邪な笑みが見えず、あっさりと信用してしまう。さらにはアルフレートに一任したことで安心したのか、さつさと次の懸案事項に思考を切り替えてしまった。

「あとは、どんな相手からマナを収集するか考えないといけないわね」

そう言うと言に手を当て、何か上手いやり方はないかと唸る。

日が傾き始め、黄金色に染まった森の入り口へと歩みを進めながら、彼女は色々と考えてみた。

マナを収集するなら、自分が殺したとバレてもヒューマンの反感を買わないような相手であることが望ましい。今の状態で大勢のヒューマンを敵に回してしまうと、逆に狩られてしまう可能性が高いからだ。

そこでまず思いついたのが、悪党や地上に棲む下級の魔物を狩るという方法だった。ヒューマンらが疎ましく思っている相手ならば、幾ら狩っても大丈夫だろうと考えたのである。

強すぎず弱すぎず、多すぎず少なすぎず、もつとも手頃な相手と考えると……

「まずは盗賊狩りね。魔物と違ってヒューマンのお金も持ってそうだし、都合がいいと思わない？」

「……さすがはリーゼロッテ様です。もうそこまで気がついておられたのですか」

「ふふ。これぐらい、優秀な私なら当然よ」

ドヤ顔で胸を張るリーゼロッテに、アルフレートは珍しく素直に感心したような様子を見せた。「だそうですよ、隠れてないで出てきたらどうですか？」

「え？」

誰かに呼びかけるようなその言葉に、リーゼロッテは首を傾げる。

すると前方と後方の茂みから、見すばらしい装備に身を包んだ数人のヒューマンが飛び出してきた。それぞれサーベルを片手に構えた、いかにも盗賊風の男達である。

獲物を挟み込むようにして立つことで逃げ道を塞いだと考えた男達は、下卑た笑みを隠そうとせず、リーゼロッテ達に話しかけてきた。

「へへ、よく気がついたな？」

「姿は隠していても、気配を殺しきれていませんでしたからね。私には盗賊という具体的な正体までは看破できませんでした……それぐらい、リーゼロッテ様にとっては当然だそうですよ」

「そ、そうね」

実は全くの偶然で……とは言えず、リーゼロッテは声に動揺を滲ませながらもうなずく。

だが既に、盗賊らしき男達にとってそれはどうでもいいいらしかった。

リーゼロッテに対して品定めするような視線を向け、軽く口笛を吹く。

「こりや上玉だな、ついてる」

「はやく楽しみて〜」

「馬鹿、手を出したら売値が下がるぞ」

「もったいねえなあ……お頭には内緒で、俺らで頂いちゃうつてのはどうよ？」

口々に、目の前の獲物をどうするか話し合う男達。

普通のヒューマンの少女ならば震え上がってしまいそうな内容だったが、リーゼロッテはなぜか

嬉しそうにアルフレートを振り返った。

「アルフレート、私は上玉だそうよ」

「リーゼロッテ様の見目麗しいお姿ならば、賊どもがそう思うのも当然かと」

「やっぱり、そうよね」

魅力の順位のせいで自信を失っていたリーゼロッテは、満面の笑みを浮かべる。

そんな彼女の反応に、盗賊らしき男達は困惑した様子で顔を見合わせた。

「気でも触れたか？」

「単に状況が分かってないだけじゃねーか？ 見るからに育ちが良さそうだしな」

男の一人が、リーゼロッテ達が着ている服を見てそう言った。もしかしたら、豪商か貴族の娘ではないかと当たりを付ける。が、そこでようやく違和感を覚えた。

この近辺はまだ安全なほうとはいえず、街道では魔物に襲われる可能性がある。だが二人とも、護身用の装備を何も身につけていないのだ。その服装も、あまりに場違いである。

「そういえば、なんでこんな場所を武器も持たずにほっつき歩いてたんだ？」

「さあ？ 大方、乗ってきた馬車とはぐれたとかだろ？」

男達は今も、自分達が捕食者側だと認識していた。だが本能が微かに警鐘を鳴らしており、男達ですぐには行動を起こさなかった。

そんな彼らの注目を集めるべく、リーゼロッテが一步前に出て口を開く。

「私はリーゼロッテ・シャンツァーラよ。今からあなた達を殺す者の名だから、よく覚えておいて」

マナを確実に収集するため、自分を強く印象付けようという試みであったが、男達は少女の頭がおかしいのだと確信して落胆した。幾ら容姿が優れていても、売値が下がってしまうからだ。

捕食者側である自分達が、憐れな獲物に狩られるとは微塵も思っていないがゆえの勘違い。いや、ある意味では、それも勘違いではないのかもしれない。ヒューマンの価値観からすれば、彼女は十分に狂人であった。

リーゼロッテは男達の反応を気にせず、魔力を全身に行き渡らせて肉体を強化する。

そして、彼女は行動を開始した。

「ねえ、下を見て」

「は？」

リーゼロッテから一番近い位置にいた男が、唐突にすぐ目の前に現れた彼女の言葉に、呆けたような表情を浮かべる。思わず言われた通りに下を見ると、自身の胴体に小さな手が埋まっていた。

革鎧を貫き、リーゼロッテの手が男の体内にある心臓を掴んでいる。彼がそれを理解するのと、彼女がそれを握り潰すのは同時だった。

「なん……で……？」

呻き声を残して、男が崩れ落ちる。

あまりのことに、他の男達は一樣に口を半開きにして啞然としていた。

魔力によって身体強化した彼女の動きを、誰も目で追えなかったのだ。男達には、リーゼロッテが瞬間移動したようにしか見えていない。

さらには革鎧を物ともしない、素手による攻撃。そのどちらも、男達にとっては完全に想像の外だった。

「……手が汚れたわ」

「これをどうぞ」

リーゼロッテはアルフレートの下へ戻り、彼から受け取ったハンカチで手を拭く。

男達が理解を超えた事態に固まっている間に、リーゼロッテはカードを取り出しマナを吸えているかどうか確認した。

【名前】	リーゼロッテ・ シャンツァーラ
【種族】	魔人
【レベル】	1 → 2
【取得マナ】	0 → 10
【魔力値】	60 → 62
【スキル】	マナ吸引

「思ったより、レベルが上がるのが速いのね」

「最初は皆そうですよ。ただ個人差はありますが、レベルアップに必要なマナの量はレベルが上がるごとに急激に増えていきます」

アルフレートの説明の半ばで、我に返った男達が騒ぎ始める。

また手が汚れることを嫌ったリーゼロッテは、事切れた男が所持していたサーベルを拾い上げ、二人目はそれで攻撃することにした。

どうやら自分の動きが見えていないらしい相手にもリーゼロッテに殺されることが認識できるよう、即死しない腹部を狙ってサーベルを突き出す。

「ほら、刺さってるわよ」

「あ……ああっ」

リーゼロッテの声から一拍遅れて、背中までサーベルを貫通させられた男が悲鳴を上げた。

サーベルを引き抜き、男が激痛のあまりうずくまっても、すぐに止めを刺すことはしない。そうして一人一人に、自分がやったのだと印象付けながら殺していく少女。

男達の目に彼女は、人を殺すことに愉悅を感じる狂人のように映った。

「な、なんだこいつ!?」

「化け物だっ!!」

あつという間に半数がやられたのを見て、リーゼロッテ達の後方に立っていた二人の男が、背を向けて逃げようとする。だが一步踏み出したところで、二人は同時にバランスを崩してその場に倒れ込んだ。

地面を踏み損ねたような感覚に、倒れた男達は自身の足下を振り返る。すると、両足の膝から下が消えているのが目に映り、遅れて襲ってきた痛み二人は悲鳴を上げた。

リーゼロッテは、彼女の臂力に耐えられず壊れたサーベルを放り捨て、少し拍子抜けしたような声で言う。

「聞いていたよりも、弱かったわね」

「ですが、決して油断はなさいませう。これらは所詮、盗賊です」

「分かっているわ」

アルフレートの忠告に応じつつ、リーゼロッテは地面に倒れているヒューマンらを見回して溜息をついた。

「それにしても、毎回こんな戦いをするのは少し面倒ね」

「別にここまで丁寧になさらずとも、マナは吸えますよ」

「そう」

次からはもう少し手を抜こう。そう思いながら、リーゼロッテはまだ息のあるヒューマンの中で一番元気そうな者を探す。血を失いすぎて蒼白な顔になっているものの、斬られた足をどうにか止血していた一人の男に、彼女は歩み寄った。

「ねえ、他に仲間はあるのかしら？ あなた達の巢があったら嬉しいのだけれど」

そしてその男が、仲間内で一番の地獄を味わうこととなった。

◇ ◇

「またレベルが上がってるわ」

「……今なんとおっしゃいましたか？」

街道から逸れて森の中に入り、盗賊の男から聞き出したアジトへ向かっている途中。

カードを見たリーゼロッテが何気なく呟いた言葉に、アルフレートは耳を疑った。

「スキルも増えているようね。これはどういった能力なのかしら？」

「少し拝見してもよろしいですか？」

「いいわよ」

リーゼロッテからカードを受け取り、そこに表示されているものを見る。

その内容に、アルフレートはわずかに目を見開いた。

【名前】	リーゼロッテ・ シャンツァーラ
【種族】	魔人
【レベル】	4
【取得マナ】	39
【魔力値】	67
【スキル】	マナ吸引 影占い

「これは……」

「どうしたのかしら？」

訝しげに首を傾げるリーゼロッテに、彼はカードに示されている数値の異常性を説明した。

別に魔力値が急上昇したわけではない。むしろレベル四でこの数値は、かなり低いと言えるだろう。

彼が驚いたのは、たった三九のマナでレベルが四になっていたことだった。普通ならば、レベルアップのたびに、次のレベルアップに必要なマナの量は数倍以上になるはずなのだ。例えば一〇のマナでレベルアップしたら、次は五〇前後のマナが必要といった具合に。

だがリーゼロッテのレベルは、そういった常識的な上がり方をしていない。どうやら彼女は、レベルアップに必要なマナの量がほとんど変化しないようだった。

「今後、このペースでレベルアップが続くようなら、すぐに魔力は膨大な数値になると思われます」

「そう。なら魔力に関しては、そのうち一位を狙えそうね」

「それどころの話ではないのですが……」

ゲームの参加者どころか、魔族史上最高の魔力値に達するのもあつという間だろう。

その異常な魔力は、もしかすると地上を見捨て天界に引き籠った神や天使どもさえ刺激するかもしれない。そうでなくとも、今回のゲームにはもう一人、異常な力をもつじゃや馬が参加しているのだ。

かつてないほど混沌としたゲームになりそうな予感に、アルフレートは大いに胸を躍らせる。

魔族には元々、お祭り騒ぎが大好きな者が多い。その澄ました態度とは裏腹に、彼は特にその傾向が強かった。それも、お祭りに参加して騒ぎ立てるよりも、お祭りを適度に掻き乱して傍から眺めるのが好きなのである。

実のところ、彼がリーゼロッテを追ってきた第一の理由は、もともと混乱を引き起こしそうな者の近くでゲームを見たかったからだ。

プライドが高く、見栄っ張り。良い言い方をすれば誇り高い彼女は、それゆえに幼い頃から時に妙な底力と天然を発揮する。

そのように混乱の中心になることを期待されているとは知らず、リーゼロッテは顎に指を添えて考え込んでいた。

「……そうすると、今後の方針を少し考え直さなければね」

「と、言いますと？」

「総合評価で一位を目指すなら、他の順位も上げないといけないわ。将来的に魔力で首位になるとが決定的で、マナの収集を慌ててする必要がないのなら、優先すべき行動が変わってくると思うの」

「おっしゃる通りです」

「そこで知名度よ。知名度の順位は、相手をむやみに殺さないほうが上がると思うの」

要するに、知名度を効率的に上げるなら、皆殺しにするよりも生還させて、自身の名を広めてもらったほうがいい……と彼女は考えたのだ。

「では此度の盗賊も、襲った後で見逃しますか？」

「そうね……」

アルフレートの質問に、リーゼロッテは木々の隙間から遠目に見えてきた、盗賊のアジトであるらしい洞穴の入り口を眺める。既に日は完全に沈み、辺りは夜の闇に覆われているが、彼女の金色の瞳はしっかりと見張りらしき二人組の姿を捉えていた。

あのヒューマンの社会から弾き出された破落戸達を逃がしたところで、彼女の名を広めるのに役立つとは思えなかった。

「大してメリットはなさそうだし、やっぱり皆殺しにするわ。魔力も少しは上げておきたいしね」
そう言っ、堂々と見張りの二人の前に姿を晒す。

「こんばんは、盗賊さん」

「え……あ？」

こんな時間に灯りも持たずにやってきた、どう見ても血なまぐさい荒事とは無縁そうな見目麗しい少女。その違和感の塊のような存在に挨拶され、男達は眉を顰めて目を擦る。どうやら、見間違いか幻覚の類だと思っらしい。

戸惑う男達に対して、彼女は自分の姿を見せつけるがごとく、両手を広げた。

「私の名はリーゼロッテよ。今後は無いし、よろしくしないでね」

かくして、魔人の少女による一方的な虐殺が開始された。

異変は、すぐに洞穴の最奥にいる彼女の下まで伝わってきた。微かに聞こえてくる音に、ソフィーという名の少女は青い瞳の動きを止め、じっと耳を澄ます。

(……何かあったのかな?)

最初は小さく、だが徐々に大きくなってくる、盗賊達の声。それが怒号や悲鳴だと分かったところで、ソフィーは何かが起きていることを確信した。

外の様子が気になるも、今の彼女には身じろぎ以上のことができない。洞穴の壁面に穴を堀り、そこに鉄格子を取り付けただけの簡素な牢屋。そこにソフィーは腕と足を縛られた状態で転がされているのだ。

彼女は盗賊の仲間ではなく、彼らに騙され拉致されてきた身の上だった。縄で固く拘束されているため、湿った地面の感触を不快に思っても立ち上がることはできない。

後ろで一つにまとめた長い金髪も、友人からは元気で脳天気そうだと評される顔も、今は泥で汚れてしまっていた。十五という年頃の女性としては、受け入れがたい状況である。

でもそれも、もう少しの我慢かもしれないと、ソフィーは思った。盗賊達の声の慌てた様子から、街から派遣された騎士か傭兵の類が退治しに來たと想像したのだ。

だが、あまりにもおぞましい断末魔の叫びが連続して聞こえてくるので、ソフィーは次第に不安になってきた。戦闘音は近づいてくるのに、剣と剣がかち合うような金属音が全くしないのである。

それはつまり、今盗賊達と戦っている何者かは、刀剣などを装備していないということであり……

(ま、まさか強力な魔物に襲われている……とか?)

思わずソフィーは目の前の鉄格子を見て、これがどれだけ丈夫かを考えてしまう。

だが、もし襲ってきた魔物が鉄格子に阻まれソフィーに手出しできなかったとしても、彼女をここから出す者がいなければ、結局死は免れないだろう。むしろ飢えによる緩慢な死に比べれば、いつそ一息に殺られてしまったほうがマシかもしれない。

しかし、そんな理性的な考えよりも、生存本能のほうが勝った。地面を這うように体を動かし、できるだけ牢屋の奥へと移動する。

やがて盗賊達の悲鳴が途切れると、ソフィーの不安は一気に膨れあがった。

何かが近づいてくる気配を感じ、彼女の心臓が早鐘を打ち始める。果たしてやってくるのは、頼もしい兵士か、それとも凶悪な魔物か――

だが、やがて彼女の視界に現れたのは、そのどちらでもなかった。どこぞの貴族の令嬢のような装いの少女と、それに仕える上級使用人のような男の二人組だったのである。

こんな場所ですれ違うには、あまりにも違和感がありすぎる二人に対して、ソフィーは不安よりも困惑を感じた。

「何だか盗賊じゃなさそうなヒューマンがいるわね」

「見たところ、どこかで攫ってきた彼らの商品でしょう」

「そう。……どうしようかしら？」

何かを悩むような仕草を見せる少女に、ソフィーはなぜかとても嫌な予感に襲われた。往々にしてそういった勘がよく当たると自覚していた彼女は、慌てて口を開く。

直感的に、この少女に考えさせては駄目だと思ったのだ。

「あの、あなた達は一体？」

「……こういった質問には、どう答えればいいのかしら？」

少女はそこでも何かに迷う素振りを見せたが、ソフィーが口を挟む前に答えた。

「私の名はリーゼロッテよ。よく覚えておいて」

「えっと、私はソフィー。よろしくね」

別に名前を尋ねたわけではなく、また少女だけでなく二人に聞いたつもりだったが、なぜか男からの返答はなかった。だがそれらに関してはひとまず置いておくことにして、ソフィーは一番気になっていたことを聞いてみる。

「盗賊は、あなた達が倒したの？」

「そうよ」

事も無げに肯定したリーゼロッテが、おもむろに鉄格子を掴んだ。そして大して力を込めた様子もなく、あっさりと人が通れるだけの隙間を作ってしまったことに、ソフィーは目を見張る。

ヒューマンも魔力により身体強化ができるので、外見の筋肉量と実際の力が比例しないのは、別に珍しいことではない。だが、それにも限度があった。

元の肉体が強ければ強いほど、魔力による強化の効果は大きくなるのだ。逆に言えば、元の肉体が脆弱であれば強化の効果は小さい。

だから小柄で細身に見える体で、鉄を曲げるほどの怪力を発揮したとなると、彼女には想像もつかないほどの魔力があるはずだった。

ソフィーはふと、リーゼロッテはエルフなのではないかと疑い、彼女の耳に視線を向ける。

エルフは、森の奥深くに引き籠っている者が大半で、滅多にヒューマンの前には姿を現さない種族。そうであれば、彼女が大きな魔力をもっているにも納得できる。

そう思ったのだが、彼女の耳はエルフの特徴である尖ったものではなく、ヒューマンと同じ丸い形をしていた。

しかしエルフでなくても、盗賊達を全滅させたのは紛れもなくリーゼロッテらであり、その小さな体に秘める力が圧倒的であることは変わらない。

だからこそ、ソフィーはこう口走っていた。

「ねえ、少しの間だけ私に雇われてみない？」

牢屋の中に入ってきた二人が、彼女の言葉に顔を見合わせる。

得体の知れない強者に畏怖の念を抱くが、ソフィーはある目的のため、その強者こそを求めているのだ。

「……あなたは、お金を沢山持つてるのかしら？」

何だか妙な言い回しに内心で首を傾げつつも、それなりの報酬を払えるのかという意味だと解釈

し、ソフィーは正直に答えた。

「あ、あんまり高いお金は払えないんだけど……あ、でもお金がありそうな場所なら知ってるよ！
多分、金銀財宝ざつくざくだよ」

「ざつくざく……」

なんとなく、リーゼロッテの反応から好感触を受け取る。

そうして、ソフィーは一度は失敗した自らの企みを彼女に話すことにしたのだった。



ソフィーに連れられて辿り着いたのは、丁度リーゼロッテ達が目指していたヒューマンの街だった。人の背丈の数倍以上もの高さがある城壁に囲まれたその街は、名をニグルカというらしい。

彼女の話によれば、アズメルト王国の国境近くに位置するニグルカは、隣国チルレーシアとの交易の要所としても有名な城塞都市なのだとか。

リーゼロッテ達はソフィーの案内によって、都市の内部へ足を踏み入れる。巨大な門から伸びる大通りは、連日様々な人が行き交い、大きな賑わいを見せている……らしいのだが、今は少し閑散としていた。人々も、どこか陰鬱な空気を漂わせており、活気というものがない。

空には雲一つなく、陽の光は遮られることなく地上に降り注いでいるというのに、薄暗いようにさえ感じられた。

ヒューマンの街を初めて訪れたリーゼロッテは、物珍しそうにキョロキョロと視線を巡らす。

その都会に來たばかりの田舎者のような反応を、街の様子を見て困惑しているのだと勘違いしたソフィーは、わずかに表情を曇らせた。

「みんな呪病のせいで不安なんだよ。もう街の外へ逃げた人もいるみたい」

「そう」

ソフィーの説明に、リーゼロッテはあまり興味がなさそうに返事をする。

呪病というのは、体内に宿る魔力に感染して発症する病のことだ。

今この街で流行している呪病は感染力が強く、最初は軽い風邪のような症状から始まり、長い時間をかけて体調を悪化させ、やがては死に至らしめるというものらしい。通常の薬は効果がなく、これを治すには、千年前に製法が失われたとされる特殊な霊水が必要とのことだった。

ソフィーによると、七年前にも同じような呪病が流行ったらしいのだが、その時はカエサルという街の青年がどこからか持ち帰った霊水によって、人々は救われたのだそうだ。

満身創痍の状態でニグルカに帰り着き、霊水を住人に託して息を引き取った英雄。呪病に苦しむ人々を目の当たりにして街を飛び出した彼が、一体どこで霊水を手に入れたのかは、未だ謎とされている。

ソフィーは、その霊水を手に入れるために、リーゼロッテ達を雇いたいと言い出したのだ。

「霊水がありそうな場所は分かったの。でも、その周辺に棲みついている魔物が強いらしくて……」

「それで、護衛を雇おうとして盗賊に騙されたのね」

呪病^{じゆびやう}を何とかしたくて、ソフィーは独自に文献やカエサル^{カエサル}の遺品を調べたらしい。そして彼女なりに彼が行ったであろう場所を特定したのだが、年端^{としは}のいかぬ少女の突拍子もない話を信じる者は少なかった。

中には興味をもつ者もいたが、確証もなしに命を懸けてまで強力な魔物がいる場所へ行けというのは無理がある。

それでも粘り強く同行者を募^つり、「街のためになるなら報酬が安くても構わない」と言ってきた護衛を雇ってみたら、見事に騙^{だま}されて捕まったのである。

最初にその話を聞いた時、リーゼロッテは大いに呆れた。自分で言うのも何だが、リーゼロッテ達だって十分に得体が知れないはずだ。盗賊の連中に騙されたばかりだというのに、懲^むりずにまた同じような輩^{やから}を雇おうとしているのは、さすがに考えが足りなさすぎるだろう。

だがしばらくソフィーを観察しているうちに、リーゼロッテは違う印象を抱くようになっていた。あくまで彼女の勘でしかないのだが、ソフィーの行動の根底には一種の強迫観念のようなものがあるように感じるのだ。

それゆえに焦燥感^{しょうそうかん}に駆られ、判断が鈍り、簡単に騙されてしまう。

表面上は普通にふるまっているが、非常に危うい内面を抱える少女。その彼女が、やがて見えてきた一軒の建物を指差した。

「あれが私の家だよ」

そう言われて、彼女が指すほうに目を向けると、周りの建築物と比べて年季の入った商店らしき

建物が見えた。

「カルデイコット魔法具店？」

「私のお母さんがやっている店で、住まいも兼ねてるの」

リーゼロッテが看板の字を読むと、ソフィーがそう補足する。

だが件の店^{みせ}が近づくにつれ、なぜかソフィーの歩く速度がだんだんと遅くなっていった。やがて店の前に到着すると、彼女は立ち止まってしまう。

「どうしたのかしら？」

「ちよ、ちよっと心の準備を……」

そう言って、ソフィーは深呼吸を繰り返した。

しばらくして覚悟を決めた彼女は、ごくりと唾^{つば}を呑み込むと、恐る恐る扉に手を掛ける。そして上に取り付けられた、来客を知らせるための小さな鐘が鳴らないように、ゆっくりとその扉を開いていった。

「た、ただい——まぎゅ」

そのか細い声で言い終わる前に、スコーンっと小気味よい音を立てて、ソフィーの顔に何かがぶち当たる。店の商品らしき木製のそれが地面に落ちると、扉の隙間^{すきま}から伸びてきた細い腕によって、彼女は中に引きずり込まれた。

続いて、中からドスの利いた女性の声が響く。

「おんどれあああああ、どんだけ人が心配したと思っとなるン」

「お、おがぁちゃん、ぐ、ぐるじい……」

「店の金持ち出して何日も行方くらませおつてからに！ 見るからに怪しい連中を引き連れて街の外に出たつて聞いた時は、心臓が止まるかと思つたわ！」

「ご、ごめんなさい」

何だか愉快ゆめそうな気配を感じて、リーゼロッテは中を覗き込んだ。

すると、ソフィーを片手で持ち上げて憤怒ふんぬの形相ぎようそうを見せていた女性が、すぐにリーゼロッテ達の存在に気づく。そして掴つかんでいたものを離すと、一転して表情を笑顔に変えた。

どこかソフィーに似た顔の、長い金髪を腰まで伸ばした女性である。どうやらソフィーの母親のようだが、外見が若く、とても一児の母には見えなかった。

床に落とされたソフィーが「ぶぎゃっ」とおかしな声を上げたのにも構わず、彼女は柔らかな声でリーゼロッテ達に話しかけてくる。

「あらやだ、ごめんなさい。お客さんかしら？」

その問いにリーゼロッテが応じる前に、床から立ち上がったソフィーが二人を紹介した。

「えっと、私が雇った護衛さんだよ。盗賊から助けてもらった時に知り合……つて……」

再び色濃くなった怒りの気配に、ソフィーが顔を青くして声を萎しぼませる。母を見ると、筋肉で無理矢理固定した歪いびつな笑顔の上に、幾つもの青筋が浮かび上がっていた。

「へえ？ つまり盗賊に捕まるような危ない状況に陥おちつてたのね？ 詳しく聞かせてもらえるかしら？」

「そ、それには深い訳が——ぎゃあああああ」

頭を掴まれたソフィーが、ギリギリと骨が軋きしむ音を立てながら持ち上げられ、悲鳴を上げる。

二人のそんなやり取りは、その後も長々と続くことになった。



ソフィーと彼女の母親であるアリサは二人で話があるらしく、ひとまずリーゼロッテ達は客室に通された。

扉の向こうの気配が遠ざかったのを確認すると、ベッドに腰掛けてくつろぐリーゼロッテに、アルフレートが声をかける。

「よろしかったので？」

「何のことかしら？」

「あのヒューマンの依頼を受けたことです」

「そうね……危険地帯の奥に千年前の遺跡があつて、そこに霊水を作る施設と、ついでに財宝まであるなんて話、誰が聞いても信じなかったのは納得できるわ。私も信じてないもの」

「ではなぜ？」

怪訝けげんそうな表情を浮かべるアルフレートの問いに、リーゼロッテは目を輝かせて即答した。

「ロマンよ。一度やつてみたかったの、トレジャーハンター」